

8月15日

～戦争体験と戦後の日本～

1945年8月15日、日本は太平洋戦争で敗戦しました。

この戦争は戦地での戦闘員の犠牲（約230万人）を始め、甚大な被害をもたらしました。本土も各地が空襲され、民間人に犠牲者が多かった戦闘として、東京大空襲（約10万人）、沖縄戦（9万4千人）、広島原爆投下（約14万人）、長崎原爆投下（約7万4千人）などが挙げられます。

政府は8月15日を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」として、全国戦没者追悼式を主催していますが、一般的には終戦記念日と称されています。実際には敗戦の日です。このような失敗から学べることは多くあり、二度このような惨禍を繰り返さないようにしなければなりません。

戦後79年が経過し、この間、日本は戦争こそ起こしていませんが、安全保障の費用、装備、考え方は大きく変化しています。本当に変えて良いのか、どのように変えるのが望ましいのか、8月15日を迎えるに当たって、立ち止まって熟考してみる必要があります。



終戦の日、 出撃を免れた少年飛行兵

最年少の15歳で陸軍少年飛行兵に志願して入隊。
8月13日に出撃準備命令を受け、8月15日に出
撃を覚悟していると、玉音放送が流れ、終戦。戦死
を免れた。

戦後、内装業に従事しつつ、170体余りの仏像を
掘り、「慰霊」と「語り部活動」を続けている上野
辰熊氏（96歳）に話を伺った。



うえの たつくま
上野辰熊氏

1928（昭和3）年3月生まれ。
山口県萩市出身。
現在、埼玉県新座市在住。
元陸軍少年飛行兵 陸軍伍長。
万世特攻慰霊碑奉賛会理事。
飛行第66戦隊会会員。

山口県萩市から中国に渡る

父は山口県萩市で材木屋を営ん
でいましたが、私が幼少の頃、^{*}昭和
恐慌となり、全財産を失い、家
族全員満州に渡りました。初めて
の冬は零下40度の極寒で、弟妹二
人^{*}を疫病で亡くしました。

父は満州鉄道の敷設工事や駅舎
造りなど、土木の仕事を始めまし
た。私は日本の小学校に通ってい
ましたが、満州の牡丹江^{ムダンジャン}から佳木
^{ジャムキ}（黒竜江省東北部）^{*}までの鉄道
工事が終了したので、支那事変^{チナセン}が
始まり、間もなく天津に家族で移

住しました。父は1年間製材業を
支那人に教えて在留し、その後、
華北交通の鉄道工事に移り、蒙
^{モンゴル}大同（現山西省大同市）と豊鎮^{フオンチン}駅
の鉄道の仕事をしましたので、家
族共々大同に移住しました。

父は鉄道の仕事を続けていまし
たが、昭和14年に鉄道事故で亡く
なりました。長兄は間もなく陸軍
に入営したので、残りの工事は、
姉婿の義兄が完成させました。義
兄が私たち家族の面倒を見るから、
仕事が多い北京に一緒に行こうと
言ったので、全員北京に移住しま
した。

1年違いの次女は高等女学校を
中退し、私も中学校2年で中退し、
軍属で派遣軍に行ったところ、人
事の中佐の方から、「ここではお茶
汲みくらいしかない。俺が世話す
るから」と言われたので、その方
の口利きで、日本の国策会社の北
支那開発株式会社に入りました。
そこで文書課電報係に所属し、暗
号作成を習得して通信の仕事をし
ていました。

^{*}昭和恐慌＝昭和5年から翌年にかけて日本で起こった恐慌。

^{*}疫病＝小兒赤痢。

^{*}支那事変＝日中戦争に対する、第二次世界大戦末までの
日本側の呼称の一つ。



入隊直後の軍服姿（15歳）

満15歳になると、母と会社の許しを受け、憧れていた陸軍少年飛行兵入隊に応募しました。学科試験と身体検査を北京で受け、身体検査は合格したのですが、学科試験合格通知は1ヵ月経っても届かなかったの
で、駄目かと思って仕事を続けていました。

少年飛行兵に合格し、大津市へ

その年の9月19日に学科試験合格通知が届いて、「大津少年飛行兵学校（滋賀県）に9月24日8時出頭せよ」とありました。しかし、手続きは複雑でしたが、早急が必要で、送別会をしてもらう時間も、千人針

を作ってもら
う時間もあり
ませんでした。

具体的に
は、同級生の
憲兵隊員の父
親に頼んで、
当時、コレラ

の流行で1週間はかかった許可証を即日に出してもらいました。また、役所に行って便宜を図ってもらって渡航証明書を出してもらい、学校へ行って旅費の半額券も即日に出してもらいました。

旅費は半額といっても、自己負担で、当時の金額としては大金の110円でしたが、給料を貯めていたので買うことができました。北京から釜山（朝鮮）まで汽車で移動し、釜山から船で下関港まで渡り、下関から汽車で大津市に行く一人旅でした。

陸軍に入隊したかった理由は、金銭のことではありません。北支那開発で、現地の支那人を使っていたが、支那は日本の属国のようでしたから、支那人が半奴隷のように低賃金で働き、最下層の生活をしていました。それを見て、日本を敗戦国にしてはいけないと思ったのです。私は15歳の少年でしたが、そのころはここ数年肌で感じていました。当時のアジアの独立国は、日本とタイくらいで、他はヨーロッパの植民

地になっていたのです。

もう一つの理由は、日本軍は負けを知らない強い軍隊だったのです。また、中学校教育では軍人を讃える軍事教育でしたので、憧れもあって、それで自然と軍人になりたいという気持ちが強くありました。

大津では、3日間の入念な適正検査後、操縦、通信、整備の3つに分けられ、私は操縦の適性があると判断され、操縦の配属となりました。

大刀洗飛行学校での軍隊生活

我々は、すぐに夜行列車で大刀洗^{あらい}陸軍飛行学校（福岡県）に異動になったので、驚いて班長さんを探ねると、「君たちは1年間の少年兵学校の教育期間を省いて、即実用学校に入る」という話で、結局、飛行兵の養成が即席になったということです。

私は、大刀洗陸軍飛行学校の甘木生徒隊の一員として、10月11日に入隊式に参列し、正式に陸軍生徒とな

りました。最初の3ヵ月間は、休日はなく、月月火水木金で、肉体の鍛錬が主でした。朝は6時起床。士気を高めるために、毎朝、皇居に向かって遙拝。朝食と食器の後片付けを終わらせると、8時には集合して訓練開始。最初は駆け足、行進、航空体操、ガスマスクを付けての駆け足、銃器の手入れなどの練習。お風呂は中隊ごとに毎日入れましたが、イモ洗い状態でした。夕食後は衣類を自分で手洗いし、各班ごとに分かれて便所からすべて掃除をしました。

私の10中隊は、生徒数24名ごとの8班で、全員で196名でした。私の班には、2名の朝鮮人がいて、朝鮮人と言われて馬鹿にされることがないように入隊を希望したと言っていました。しかし、実際には誰も差別することはなく、仲良くしていました。

休みの日は、正月の3日間だけで、その翌日から飛行機の飛ぶ原理や、機材を分解した部品で飛行機の構造や、グライダーの操縦、

実弾射撃の方法などを3ヵ月で学びました。

最後の卒業行軍は、背囊^{はいのう}の中の飯盒^{はんごう}に米や副食を入れ、外套^{がいとう}合羽を巻いて、小銃を担いで完全軍装し、太宰府まで40数キロの往復行軍は過酷でした。

生徒隊卒業後は、全員陸軍上等兵となり、各地の飛行教育隊10カ所に分かれ、私たち10中隊の半数は朝鮮京城大刀洗陸軍飛行学校京城教育隊に加わりました。最初は操縦しやすい中等練習機で約40時間練習し、基本の操縦訓練は終了でした。

1機につき助教1人に6人の飛行兵が交代で操縦を習い、初めは場周離着陸を習い、助教と一緒に乗りました。練習機には、前に助教が乗って、後ろに生徒が乗り、助教が操縦するので、手足の感覚で操縦を覚えなさいといけないのです。練習機の操縦は、グライダーと違って手首を少し動かすだけで、機体が敏感に反応して動くので、初めのうちは怖かったです。4カ

月間で離着陸、横転反転宙返りの高等飛行、盲目飛行、編隊飛行を取得して飛行学校を卒業しました。飛行練習の時に誰かが失敗すると、全員連帯責任で、教官から毎回のように平手打ちや、皮のベルトでビシッと叩^{たた}かれました。

その次は、戦闘、軽爆、重爆、偵察の各分科の教育飛行隊へ別れました。戦闘は満洲^{マンジュウ}へ、軽爆は平壤^{ピョンヤン}へ、重爆偵察は宣徳^{シユンデ}へ別れて行きました。

我々15期の甲と乙の軽爆組は、平壤の朝鮮101部隊（128名）へ赴任となりました。我々は、高等練習機を使つての操縦練習は省かれ、すぐに実用機の99式襲撃機を使つての操縦練習となつたのですが、これも6ヵ月間が4ヵ月間に短縮されました。

ここでも基本の場周離着陸や、高等飛行や、編隊飛行の操縦練習をして、それが終わると、本職の急降下爆撃、緩行下射爆撃、超低空水平爆撃、地上部隊の戦車やトーチカや飛行場各種の攻撃方法の